

生蝕記の原稿をよんだりして、益々僕を怪しく思つたのだ。

此の時も有島を訪問しようと思つて行かなかつたが、中央美術社へ刑事が電話を掛けたりしてやつと放免してくれたのだつた。

有島は紐の付いた細布を、首に掛けて出て来た、丁度食事中だつたのだ。

『お待ちせしました』と言つて、卓子に相對して掛ける。

亡くなつた細君の顔が、僕の *Father* に似て居ないとも言へない。

油畫が四五枚壁に凭せてあつた。

僕は實に感傷的な聲で、二宮の宿で書いた詩を有島に讀んで聞かした。

他人の耳をほじくるのには、喉を顫はす事も必要だ。

兩手を組み合はす癖のある有島は、泣きそうな目をしばたゝいて聞いてゐた。

『二階に弟が來てゐるのです、あなたの弟さんが亡くならない前に、一度お歸りになると好いですね。

ストリンドベルグの *Countess Julia* を讀まれた事ありますか』